せとる　くおーたりー
C. E. T. L. Quarterly
教育・学習活動支援センター広報　No.5　発行日　11. Feb. 2002

授業アンケートの活用

教務部長　馬　場　善　久

本学は平成11年度の後期に授業アンケートを開始した。本年度後期で5回目の実施である。それ以前にも、学生自治会が中心となって実施されたアンケートの取り方や公表方法に関して教員の間で若干の誤解が生じ、現在では中止されている。教学検討委員会の所管による現行の授業アンケートは着実に実施されているようだ。

授業に関するすべての評価項目において、大学の全体としては平均が3点（4点が最高点）という学生の高い評価を得ている。アンケート結果から見えてくる大学全体として改善していかねばならない問題点として一つあげれば、授業外の学習時間が充分に確保されていないことであろう。

私自身にとっても毎回授業アンケートの結果が、前回の授業の反省と次期セメスター以降の授業の改善を考える良い機会となっている。評価項目と自由記述の両方が参考になるが、自由記述が若干少ないので学生の皆さんの意見を期待したい。自分では全く気がつかない講義の欠点を指摘され、授業の改善の参考になっている。一部の学生からは「授業が難しすぎる」というコメントが寄せられる。担当科目が統計学や計量経済学なので、ここ数年は、毎年、統計量や定理の数学的導出の説明よりは、応用面に重点を移して説明しているが、学期ごとに実験を繰り返しているというのが実情かもしれない。

授業アンケートを何のために実施するのかと疑問を呈する人が、教員、学生の双方に少なからずおられるという。ここで、授業アンケートの導入したときの目的をもう一度確認することは有益であろう。平成11年秋の導入時に「授業アンケートの目的は本学の教育の質の向上、授業方法の改善のためである（以下略）」と明記されている。導入の目的に立ちかえって、アンケート結果の活用を考える必要がある。

本学における教育の質の向上を図るためには、教育の質を何らかの方法で測ることが必要不可欠である。もとより、学生による授業アンケートだけで教育の質を測ることはできないが、教育が教職員と学生の相互作用の中にある限り、学生によるアンケート調査結果は、重要な情報を提供するはずである。また、教育は個々の授業だけで独立に行われるわけではない。全体のアンケート調査を大学全体、学部、学科等の組織として、教育の質の向上に生かす取組みが今後ますます必要となろう。授業アンケートをPDCA (Plan, Do, Check, Action, 計画-実施-点検-改善)のサイクルの中に位置づけ、有効に利用できるか、本学の課題の一つであると考える。

本年度３回目の授業見学会を開催

比較文化研究所　柴　田　博　文

11月19日月曜日３限目のカウンセリング（園田雅代教授担当B302教室）の授業を見学させて戴きました。90分が文字通りあっという間に過ぎた魅力ある授業でした。この授業は教育学部で開講されていますが、80数名の学生のうち、３分の１は他学部の学生が受講している、という事を伺い、これはカウンセリングに興味を持っている学生が多いというだけではなく、園田教授の名が広くキャンパスに拡がっている証しでもあると感じました。

まず、驚いたことは、遅刻者が少ないこと（概ね５分過ぎには全員が出席していた）。加えて、昼食後の魔の３限目にもかかわらず、居眠りの学生がいないことでありました。その陰には園田教授の計算？しぬかれた配慮が伺われました。それは、カウンセリングを講義形式ではなく、演習形式で行われていたこと、グループでのディスカッションを取り入れられていること。フィードバックを盛んに行われたこと、などです。それから、あの大教室でマイクなしで、一番後に座っていた私にも聞こえるくらいの通る声（決して大声ではありません）で授業されていたことや、ボディ・ランゲージの素晴らしさでした。

カウンセリングは言語的な関わりだけではなく非言語の関わりが重要ですが、授業そのものがカウンセリングだ、との思いを強く感じました。「カウンセリングにとって『場面構成』はなぜ必要なか」という質問に対して、学生の反応がやや遅いと思われるとすかさず、「もし『場面構成』というのがなかったらイメージしやすいですよ」と学生が答え易いように臨機応変に対応される柔軟さに脱帽しました。学生に飽きさせないだけではなく、学生を大事にし、考えさせることが十分に伝わってくる授業でした。授業終了後の懇談の席で、「私は学部での授業では、ピエロに徹しているんです。」という言葉が非常に印象的でした。授業が終わって満足するのは、教員か学生かを考えさせられた授業でした。

（５ページに続く）

私の授業アンケート活用法

「授業アンケートをこう受けとめた」

教育学部
井　上　尚　美

もう30年も前の話になるが、私はアメリカの大学で、有名な大教授でもちゃんと授業アンケートをやっているのを見て、ひとつ自分もと思い、前任の国立大学からずっと個人的に実施してきた。それを通して学生諸君の意識の変遷がわかって、なかなか興味深いものがある。

私に対する批判的コメントとして、授業アンケートの中でこれまで一番多く出たのは、次の二つである。

①「先生の話し方は早口で、次から次へと展開していくので、眠っている暇がありません。でも、ついていくのが大変です」

②「黒板の字が汚くてよく読めないことがあります」

いずれも私には痛い批判で、何とか直そうと試みてはいるのだが、どうにも直らない。本人も早口だと思っているのだから、他の人には尚更であろう。

私は江戸っ子でせっかちで、グズグズしていることが大嫌いで、何でもテキパキやるのが好きな性分だから、これはどうも棺桶の中に入るまで直らないらしい。家内が、死ぬ時にもセカセカとあわてて死ぬのではと、いつも笑うくらいである。

だから、毎年、新学期の始めには今年こそ「ゆっくり」しゃべろうと心に誓うのだが、つい夢中になるといつの間にか早口になっているのである。

唯一の口実として、「私の授業は半期２単位だが、本当は通年４単位にしたいくらい中身の濃い内容なのだ。それを半期でやるのだから、どうしても早口になってしまうのだ」と学生諸君には言いわけをしているような次第である。

次に、黒板の字が汚ないということについて。

私は大学を卒業して、すぐに中学校の教師になった。旧制の大学だったから、今日のような「教育実習」なんてものは経験しなかった。

しかし、さすがに心配だったので、昔教わった先生の所に菓子折を持っていき、これから教師になるについての心構えをおうかがいした。すると、

「君、バンショには気をつかわなければいかんよ」

と言われた。「バンショ？」ハテナ——私は銭形平次などの捕物帖が好きなのだが、まさかあの「番所」ではないと思ったけれど、とっさには何のことかわからなかった。しかし話を聞いているうちに「ああ板書か」と、ようやく合点がいった（教育用語には他に「ハンショウ」というのもあった。これも「半鐘」ではなく「模範で唱える・歌う」ということである）。

小・中学生は、教師が黒板に書いたことは必ず全部ノートに写す。だから私も黒板に書く字は——下手ながらも——しっかりと楷書で書いたものだった。また、体で黒板を隠すように書くのではなく、半身になって子どもから見えるように、しかも書く事柄を口で言いながら書く、という技術も身につけた。

しかし、それは小・中学校での話であって、大学では、黒板に書いたことでも学生諸君が必要ないと思えばノートしなくてもいいし、また黒板に書かないことでも、これは大切だと思えばノートに書く、というのが当然だろう。だから「板書」は、大変重要なところとか、バンショのように、とっさにはどんな字だかわからないようなものについて字の形を示せばよいという考えから、講義内容をしゃべりながら多少崩して書くのだが——尊敬する同僚諸氏も恐らく同様ではあるまいかと想像するのだが——それが学生諸君には困るらしい。

これも毎年、今年こそはキレイに書こうと決意はするのである。

このように、授業アンケートは、少なくとも私にとっては、自己反省のよい資料になるので、いつもありがたく「拝見」している。

ただ、中には、ときどき意外な記述にぶつかって当惑することがある。

例えば、私はいつも始まって5分以内に（Akademisches Viertelということばもあるが）行くことにしているが、

「先生は時間どおりに来ない」

と書いてあったり、割に大きな声で話しているのだが、

「声がハッキリしない」

などと書かれることがある。

しかし、それはごく一部であって、大部分の学生はその逆のことを書いているので、たぶん、たまにしか出て来ない学生や、私に叱られた学生が腹癒せのつもりで書いているのだろう、と楽天家の私は考えることにしている。

また、できればその学生に直接会って、もっとその意見を聞き私の考えも聞いてもらいたいと思うようなコメントもあるが、無記名だし、もうその講義科目は終了してしまったので、どうしようもない。また、お世辞を書いている学生もあるが、これも無記名だから、おまけの点をあげようにもあげられない。

以上、いろいろ感じたことを述べたが、私はこのアンケートというものは、とかく「ひとりよがり」になりがちな私のような怠け者にはよい薬であり「通信簿」であると思っている。

(2ページから続く)

●園田先生の感想●

お忙しい中を先生方、ご参加くださり、ありがとうございました。私は学部の授業については「わかりやすく面白い授業を、厳しい試験・レポートを」をモットーにしています。授業のねらい・教材・進め方・フィードバックの仕方などなど、まだまだ私も試行錯誤ですが、でもその工夫や確かめが面白く、授業は飽きることがないと痛感しています。先生方に見ていただき、緊張しつつも、後で種々のご意見をいただけ貴重な機会となったことを心より感謝しております。

キャンパスFDニュース

第2回「ＩＴを活用した教育事例発表会」

工学部　戸　田　龍　樹

昨年12月３日（月）午後4時40分より、工学部棟E201教室において全学の教職員を対象に「ITを活用した教育事例発表会」が開かれた。内容は、(1)工学部小林登史夫教授と陳分西助手による「ITによる授業支援の実例」、(2)文学部林亮助教授による「講義支援システム：Jenzabar（ジャンザバー）を利用して」、(3)インターレクト株式会社代表取締役オイヴィン・ホーン氏による「e-Learningマネジメントシステム『.campus』の紹介」の３演題であった。

小林教授と陳助手は工学部でにおけるITを取り入れた授業例を紹介された。磁気カードリーダーによる学生証の出欠記録や、演習問題の出題、資料の閲覧などの事例を紹介された。特にランダム形式の演習問題の出題は一定の教育効果をあげていることが報告された。林助教授は講義支援システムとして利用されているJenzabarの実用例を説明された。授業内容の掲示、レポートの提出や資料の配布など、利便性が高く、また学生からのフィードバックを受けられる点、学外からのリモートアクセスに優れていること、適宜最新のシラバスに変更できることなどをIT教育の優位性として挙げられた。インターレクト株式会社の『.campus』は、Office 2000（またはOffice xp）で制作でき、実際の使用方法と機能の拡張性が解説された。利

用事例として青山学院大学での『.campus』の導入例が紹介された。大学・短大間の単位互換、他大学との学校間交流、AO入試学生の事前学習への利用が提案された。

最後に、.campusとe-Learningを中心に質問時間が設けられた。参加した教職員の関心は高く、終了予定時刻の6時20分を1時間も越える活発な質疑応答が行われ閉会した。しかしながら、残念なことは参加者の人数が40名程度と少なく、このことは大学全体としてのIT教育の導入に関する危機意識の低さとも感じられた。参加者の年齢層を勘案すると、本学におけるIT教育の遅れと教職員の高齢化には関係があるようにも感じられた。多くの大学でIT教育の普及が急速に進むなか、本学でもこの様な事例研究の発表会や勉強会が今後も引き続き開催されることが望まれる。IT教育の導入にあたっては、個々の教員の労力を軽減するシステムを作りあげなくてはならず、大学の積極的な支援が不可欠であると感じた。

★授業改善研修会が大盛況★

1月22日午後4時より、高橋一郎経済学部教授による授業改善研修会が、第1回海外教員派遣研修報告会と兼ねてA523教室で行われた。全6学部をはじめ研究所、別科、短大から22名の教員が集い、学生相互の話し合いを授業の随所に入れる協同学習法と呼ばれる講義スタイルの実効性を自らの実践体験を通じて語る高橋教授の発表に熱心に聞き入っていた。(詳しい内容や参加者の声は次号に掲載予定)。

さらに、研修会終了後、6時からの教育サロン(講師を囲んでの茶話会)にも14名の教員が参加し、活発な情報交換を行った。

編集後記

● 本号は「授業アンケート」特集の第1弾として、馬場教務部長と井上先生に原稿を寄せていただきました。

● 次号では第2弾として先に実施しましたアンケート結果を掲載する予定です (N)

C. E. T. L. Quarterly No. 5

編集・発行
創価大学 教育・学習活動支援センター
〒192-8577 八王子市丹木町1-236
Tel：0426 (91) 9782 内線 2148
E-mail：cetl@s.soka.ac.jp